

氏名(本籍)	大森美保(秋田県)			
学位の種類	博士(ヒューマン・ケア科学)			
学位記番号	博甲第6251号			
学位授与年月日	平成24年3月23日			
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当			
審査研究科	人間総合科学研究科			
学位論文題目	回復期リハビリテーション病棟における日常生活機能評価と退院先との関連			
主査	筑波大学教授	医学博士	田宮	菜奈子
副査	筑波大学教授	博士(医学)	江守	陽子
副査	筑波大学講師	博士(医学)	奥野	純子
副査	筑波大学講師	博士(医学)	鮎澤	聡

論文の内容の要旨

(目的)

本研究は、「日常生活機能評価表」の回復期リハビリ病棟の患者評価の測定ツールとしての有用性を検討する。日常生活機能評価得点と退院先との関連を検討することを目的としている。

(対象と方法)

対象は、回復期リハビリ病棟の患者診療記録539名分で、患者の基本属性と退院先、在院日数、日常生活機能評価得点とFunctional Independence Measure(以下、FIM)を調査した。日常生活機能評価表の有用性については、日常生活機能評価表とFIM得点との関連を検討した。退院先との関連については、対象を脳血管系疾患と運動器系疾患に分類し、疾患別に退院先を自宅群と非自宅群に分類して分析した。

(結果)

日常生活機能評価得点はFIM合計得点と強い相関があった。また日常生活機能評価表の項目では、13項目中10項目はFIMとの相関があったが、「安静の指示」、「手を胸元まで持ち上げられる」はほとんどが0点でFIMとの相関係数も0.3以下だった。「危険行動」はFIMとの相関は低かったが、入院-退院の変化は有意であった。

脳血管系疾患患者は、日常生活機能評価得点が8点以上の重症者で非自宅群が多く、退院時4点以下はほとんどが自宅群で5点以上では非自宅群が増えていた。非自宅群となる要因は、退院時日常生活機能評価得点以外に年齢、在院日数、同居者、認知症であった。運動器系疾患患者では、入院時が3点以下は全員が自宅群で4点以上では自宅群と非自宅群に分類され、退院時はほとんどが0点だった。非自宅群となる要因は、在院日数、同居者、退院時日常生活機能評価得点であった。

(考察)

日常生活機能評価得点はFIM合計得点と相関があり、ほとんどの項目はFIMと相関がありADLを評価していると考えられたが、項目の中の「危険行動」はFIMとの相関は低く、ADLの意味合いは低い改善度の評価として有用と考えられた。

日常生活機能評価得点と退院先との関連では、入院時得点が脳血管系疾患は8点以上、運動器系疾患は4点以上で非自宅群の可能性が高く、脳血管系疾患は4点以下に改善することで自宅群になると考えられた。非自宅群の要因は、両疾患ともに特に同居者の有無が影響していることは、同居家族の介護負担の軽減や、独居者に対する退院支援を考えていく必要がある。

(結論)

日常生活機能評価表は患者評価の指標として有用であり、項目の中にはADLに関するものとADLとは異なるものがあった。

日常生活機能評価得点と退院先との関連においては、脳血管系疾患の8点以上の重症者を4点以下に改善することが必要である。運動器系疾患においては、入院時3点以下は自宅群であったが、退院時得点は明らかでなかった。両疾患とも非自宅群の要因は「日常生活機能評価得点」以外に、「同居者」であった。

審 査 の 結 果 の 要 旨

平成24年1月10日、博士（ヒューマン・ケア科学）学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと最終試験を行い、論文について説明をもとめ、関連事項について質疑応答を行った。

今後ますますニーズの高くなる回復期リハビリ病棟において、症例を蓄積しかつ退院先まで追跡し、脳血管障害と運動器系疾患にわけ、自宅退院の要因について分析した実証研究である。在宅中心に政策が展開する中、今後の高齢者医療において有用かつ貴重な研究である。

審査委員会では、とくに研究1における論理の展開の不明確さ（尺度の意義の位置づけ）が指摘されたが、その後、これらの修正内容を確認し、審査委員全員によって合格と判定された。

よって、著者は博士（ヒューマン・ケア科学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。